



## 古代ギリシアの墓碑における運動選手像

著者	田中 咲子
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102乙第2773号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00144435">http://hdl.handle.net/2241/00144435</a>

## 導入部:

### 第1章 研究史と問題の所在

古代ギリシアでは、故人の生前の姿を石板上に浮彫りや絵画で表した墓碑が建立された。とりわけ墓碑浮き彫りは、神殿彫刻などの原作の多くが失われた今日、貴重な原作群として、当時の彫刻芸術を直接的に伝えてくれる。本論文では、こうした古代ギリシアの墓碑の中でも、運動選手像を表した墓碑を取り上げる。時代的にはアルカイック時代の前6世紀からクラシック時代後期の前4世紀に至る約3世紀間の作例を対象とする。

人物像を浮彫りや絵画で表現した古代ギリシアの墓碑の研究は、かつて今も、現存例が圧倒的に多いアッティカ地方の作例を中心に進められる傾向にある。20世紀後半に入ると、確かにアッティカ以外の墓碑も研究対象となった。しかしそれらは主として、地方様式の把握が目的だった。地域横断的な体系的な考察は、これまで試みられることがなかった。

本稿では、墓碑図像の中でも現存数が多く、時代的にも地域的にも広い範囲に作例が認められる運動選手像を表した墓碑に着目し、その時代的、地域的な展開過程を明らかにする。特定の図像に注目することによって、却って時代的、地域的な特徴が浮かび上がることが期待されるからである。本稿のもう一つの目的は、この図像の社会的役割の解明である。運動選手像はいかなる意図で選ばれた図像なのか。この問の解明は、ひいては他の墓碑図像の理解へとつながり、さらに古代ギリシアの社会史研究全般にも寄与するものと思われる。

本稿では、次の手順で考察を進める。まず導入部において研究史など基本事項を確認し、その後、第一部では前6世紀の、第二部では前5世紀、そして第三部では前4世紀の運動選手像墓碑の展開をたどる。尚、本稿巻末に補論として、葬礼観に関する論考2編「哀悼と称賛：自ら嘆く死者像の解釈をめぐる」並びに「『アキレウスの画家』の白地レキュトスにおける死者と生者」を加えたが、本要約では割愛する。

### 第2章 墓碑の歴史と当時のスポーツ

本論に入る前に、古代ギリシアの墓碑の歴史とスポーツの位置づけについて、簡単に確認する。

ギリシアで故人像が初めて墓碑に表されたのは、前7世紀中頃のキュクラデス諸島やクレタ島と想定される。しかしその例は僅かであり、前6世紀には途絶えてしまったと考えられる。人物像を表現した墓碑、とりわけ墓碑浮き彫りの伝統は、前6世紀前半にアテナイを中心とするアッティカ地方で始まっ

た。アッティカでは前 500 年を過ぎる頃から約 70 年間、墓碑浮き彫りが建立されない中断期があったが、パルテノン神殿の建設工事が終了した前 430 年頃に制作が再開した。そして前 4 世紀末に薄葬令により人物像表現のある墓碑が禁止されるまでの約 130 年間、アッティカは墓碑浮き彫りの黄金期を享受した。本稿で扱う時代は、アッティカで墓碑浮き彫りが成立してから完全に終了するまでの期間に相当する。

アッティカ以外の地方では、先述のように既に前 7 世紀に一部の地域で作例が認められたが、前 6 世紀になると、これらの地域での制作は途絶えたと考えられる。こうした状況下、アッティカで墓碑制作が始まり、さらにアッティカの北側に接するボイオティア地方でも、アッティカの影響を受けて墓碑浮き彫りが作られた。前 5 世紀になると、アッティカの墓碑制作が中断期を迎えるが、エーゲ海を挟んだ小アジア沿岸地域やキュクラデス諸島、そしてペロポネソス半島の一部でも墓碑浮き彫りが作られるようになり、その後ヘレニズム時代にまで続く伝統が生まれた。

次に、古代ギリシアのスポーツについてであるが、近代オリンピックの起源であるオリュンピアの競技祭は、伝説では前 776 年、実際にはおそらく前 700 年頃に始まった。また、それ以外の町でも、大小様々な規模で競技祭が周期的に開催されていた。古代ギリシア人はスポーツで競い合うことを大いに好んだ民族といえる。スポーツは全裸で行われた。

スポーツという言葉には、今日、文化の一つ、余暇、余技、健康づくりといったイメージがあろう。古代ギリシアのスポーツについては、現在研究者の見解が二分している。一つは軍事教練の一環であるとする見方、もう一つは有閑貴族の余暇活動である。しかしいずれにしても、スポーツにいそむことができた階層が、社会の上層階級に限られていたことは確かであり、スポーツに一種の社会ステータスという側面があったことは確かといえる。

本稿で論じる運動選手とは、すなわち社会のエリートたちであり、今日でいうスポーツを生業とするプロ選手を指すものではない。日々の活動の中でスポーツをすることもある人々が運動選手であり、運動選手「像」とは、ちょうどその活動に従事している最中として描写された人物像を指す。譬えていうならばスポーツウェアを着用していれば、それを運動選手像と呼ぶ。具体的に本稿では、次の特徴を持つ図像を運動選手像として扱う。第一に、スポーツに直接関係のある用具、アトリビュートを持つものである。投擲競技用の円盤や運動の前後に用いる小瓶アリュバロスなどがこれにあたる。第二に、裸体像

であることである。スポーツのアトリビュートがなくても、全裸であり、且つスポーツと齟齬をきたすもの、例えば戦闘用の兜や盾を持っていなければ運動選手とみなす。

## 第一部：前 6 世紀—プロトタイプの成立

第一部では、運動選手像墓碑の成立から前 6 世紀末、アッティカの墓碑制作が一時的に中断するまでの運動選手像墓碑の展開をたどる。

### 第 1 章 運動選手像墓碑の登場

現存作例から判断し、墓碑に運動選手像が初めて表されたのは前 560 年頃のアッティカであると考えられる。これはアッティカで墓碑浮き彫りが成立してから 20 年ほど経った頃に相当する。運動選手像は当初、円盤や槍など、投擲競技で用いる用具を持つ姿で表された。筆者はこれらを「競技者タイプ」と名付けた。

第 1 章では、運動選手像が墓碑図像として登場した理由を考察する。前 560—550 年頃の墓碑として、現在 10 点が知られており、全て運動選手像を表したものである。筆者は、この時期に突如として運動選手像の墓碑が急増した背景として、前 566/565 年に導入されたという大パナテナイア祭の運動競技会との関連を指摘したい。但し、墓碑図像は競技会での勝利者を意味するのではなく、大規模な競技会を開催する能力に対するアテナイ人の自負と、スポーツに付随する、家柄のよさ、若さ、美しさ、アレテーを示すものと考えられる。

### 第 2 章 アリュバロス・タイプの成立

前 550 年を過ぎる頃、運動選手が香油の携行のために用いた小瓶アリュバロスをアトリビュートとする図像が誕生した。筆者はこれを「アリュバロス・タイプ」と名付けた。当時、スポーツをする際にはこの小瓶とストレンギスというヘラを携行し、運動後、小瓶の油を体に塗って垢や埃を油にからめ、それをストレンギスで掻き落とした。第 2 章では、新たなアリュバロス・タイプが成立した社会背景として、当時の陶器画との関連性を指摘したい。すなわち、当時アッティカではアリュバロス生産が軌道に乗り、且つ、若者がこれを用いたり携行したりする様子が陶器画に頻繁に描かれた。その結果、アリュバロスが社会階級の高さや若さ、美しさのシンボルとして機能するようになったことが窺える。社会にアリュバロスの象徴性が浸透した結果、墓碑にも取り入れられたことが想定される。

### 第3、4章 多様化とエロメノス・タイプの成立

前 530 年頃になると、運動選手像に加えて、兵士像や市民像といった別の図像も、アッティカの墓碑に表されるようになる。また、運動選手像墓碑にも新たな図像「エロメノス・タイプ」が加わった。同時代の陶器画に頻繁にみられる、少年愛図像におけるエロメノス像すなわち年長者から愛される美少年と同様の特徴を持つ人物像を、筆者がこう名付けた。そこで第3章においてまず前6世紀終盤に多様化した運動選手像墓碑を概観し、第4章では、この時期にエロメノス・タイプが成立した背景、そしてそれとともにアリュバロス・タイプが衰退した背景を考察する。両タイプが入れ替わった理由として、故人の若さや美しさを、より強調する図像が好まれるようになったこと、また、陶器画におけるアリュバロスの扱い方が変化したことから窺えるように、アリュバロスがかつて獲得した象徴性が薄れたことが想定される。すなわちこの時期、陶器画ではアリュバロス単体では意味をなさず、同時に使用される、ストレンギスというヘラやスポンジとセットで描かれるようになった。そこから、アリュバロスが単なる用具と見做され、美を象徴する機能が薄れたことが窺える。

### 第5章 前6世紀の運動選手像墓碑総括

墓碑の運動選手像は前6世紀中頃に競技者タイプとして誕生し、その後約60年の間にアリュバロス、エロメノスと、計三タイプが順次成立した。当時スポーツをたしなむことができたのは貴族階級に限られたことから、いずれのタイプも一義的には生まれのよさを主張するものだったと考えられる。さらに、スポーツに付随する、若さや美しさを称える意味も認められる。これら三タイプは当時の社会や文化の動きを反映して成立している。

前5世紀以降、運動選手像墓碑に新タイプは生まれず、これら三タイプの発展型として展開した。それゆえ前6世紀は、運動選手像墓碑の基礎が築かれた重要な時期であったといえる。

## 第二部：前5世紀—運動選手像墓碑の広がり地域差

### 第1章 制作地の拡大

前500年を過ぎた頃、墓碑浮き彫りの中心地であったアッティカが、制作の中断期を迎える。代わって、それまで人物像を表さなかった地域の墓碑に人物像表現が現れた。特に、槍を持つ競技者タイプの運動選手像は、キュレネやスパルタなど広い範囲に見出せる。また、ギリシア東部すなわち小アジア

周辺域では、アリュバロス・タイプに侍童像が加わり、主人の小瓶を持つ様子が表された。

## 第2章 ギリシア東部とキュクラデス圏

世紀中頃になると、キュクラデス圏にも作例が現れ、東部と並ぶ墓碑制作の中心地域となる。墓主をエロメノスとして表した作例は知られていないが、競技者タイプとアリュバロス・タイプは両地域で制作されている。この時期の両地域のアリュバロス・タイプには、明らかな差異が見て取れる。東部では侍童像が好んで加えられたのに対し、キュクラデス圏では犬を連れただけの単独像が主である。価値観の違いとして理解できる。

これらの地域では、確かにアッティカに成立したと同じ図像タイプが継承されている。しかし、美しさやアレテーといった故人の美德を称揚する意味は失われたように見受けられる。競技用具やアリュバロスは、持ち主が運動選手であることを示す、単なる記号と化していることが窺える。また、アリュバロスに加えてストレンギス(ヘラ)がアトリビュートとして加わり、時にアリュバロスを省いてこのヘラのみが表されることもあった。図像が他の地域に伝播する過程で変化し、さらには意味も変化したものと考えられる。

## 第3章 アッティカにおける制作再開

パルテノン神殿の建設工事が終わった前5世紀終盤、アッティカで墓碑の制作が再開された。かつてのプロトタイプを継承してはいるものの、構図は大きく変化した。アッティカ以外の地域ではこの世紀中頃までの傾向を保持しているのに対し、アッティカでは家族像が好んで追加されたことが指摘できる。またアッティカでは、着衣像も好まれた。運動選手としてのみならず、アテナイ市民としての側面が強調された図像といえる。

## 第4章 前5世紀の運動選手像総括

この時期は運動選手像墓碑の制作地、建立地が拡大した時期である。時代の推移とともに東部、東部とキュクラデス圏、アッティカ、と中心地域が移動し、それに伴って図像に新たな要素が加えられた。アリュバロスにストレンギスが加わったり、東部では侍童像が追加され、また制作再開後のアッティカでは着衣の運動選手像が生まれた。アリュバロスにかつて付随していた、美や若さといった概念のように、図像の意味の中には失われたものもある一方、表現自体は多様化し豊富になった。その原動力として、様々な地域への図像の伝播があったと筆者は考える。

## 第三部：前4世紀―最盛期の運動選手像

前 4 世紀はアッティカの墓碑制作の最盛期であり、運動選手像墓碑も多数が知られている。その数は、前 6、前 5 世紀を合わせた作例数の約 1.5 倍、90 点近くになる。様式的にも図像的にもアッティカの作例が他地域に強い影響を及ぼした。この時期の運動選手像の大半はアリュバロス・タイプに属す。そこで第三部では、このタイプをさらにいくつかのパターンに分類して考察を行う。

## 第 1 章 単独像

単独像の多くは前 4 世紀はじめに年代づけられ、特に全裸像は前の世紀、前 430 年前後のポイオティアやエウボイアの作例と強い関連性が認められる。実際、これら全裸像の多くは同じ地域から出土したものがほとんどである。また、墓主像を等身の低い少年像とし、犬を毛足の長い小型犬として墓主の幼さを強調した運動選手像はアッティカで好まれており、前の世紀の《エウフェロスの墓碑》との関連が想定される。単独像の多くは、前 5 世紀との連続性を示す作例といえるだろう。

## 第 2 章 青年と侍童

前 4 世紀の運動選手像の中で、最も作例数が多いのは、侍童を伴う全裸像である。アッティカでは前 4 世紀第 2 四半期に成立したと推定される。但しギリシア東部には、すでに前 5 世紀前半からこの図像が存在していた。アッティカでは前 5 世紀終盤に墓碑制作が再開された当時、着衣の運動選手像が好まれる傾向が強く、また、侍童像は皆無であった。前 4 世紀はこれと正反対の傾向を示していることになる。また、この時期のアッティカの侍童を伴う運動選手像墓碑では、二人が心を通わせるかのような情緒的な表現が顕著になった。全裸表現や侍童像の追加にせよ、情感表現にせよ、この時期になって、アッティカにおいて墓碑図像に対する考え方が変化したことがわかる。

## 第 3 章 青年と家族

前 5 世紀終盤に墓碑制作が再開して以来、アッティカでは家族同伴の図像が頻繁に見られるようになった。但し運動選手像の場合、当初は着衣で表されていた。家族を伴う全裸の運動選手像は、前 4 世紀半ばから後半になってから主流になった。逆にアッティカ以外では、そもそも家族墓碑が多くなく、特に父と息子の組み合わせは例がない。地域差がここにも見て取れる。アッティカで家族墓碑が好まれた理由は、Bergemann が唱えるように、民主政下、家督、市民権の継承を視覚化する意図があったためかもしれない。前 5 世紀終盤とは異なり、前 4 世紀半ば過ぎの家族を伴う運動選手が裸体表現となったのは、前述のように、考え方の変化であろう。息子に先立たれた悲劇、いわば個人的な悲しみを

表明すべく、息子の若さを強調する、全裸の運動選手像を選んだものと考えられる。

## 第5章 前4世紀の運動選手像総括

前4世紀の運動選手像墓碑がアッティカを中心に展開したことは間違いないといえよう。前4世紀第1四半期までは前世紀の周辺地域の作例の名残が感じられる。しかし第2四半期以降、それまでの着衣の運動選手像に代わって全裸像が一般化し、世紀半ば以降は家族墓碑であっても運動選手像は全裸像のままで表された。こうした変化の背景として、個人的な情感や悲しみの表明が重視されるようになったことが窺える。

## 結論

運動選手像墓碑は前560年頃に誕生し、前6世紀中に競技者、アリュバロス、エロメノスの三つのプロトタイプが成立した。前5、4世紀の運動選手像は、これをもとに各地の価値観を加味して発展したといえる。とりわけ好まれたのはアリュバロス・タイプだった。そこに侍童像や家族像、ストレンギス、犬が追加され、多様なヴァリエーションが生まれた。図像が伝播し、変更が加わる過程で、当初の意味は少しずつ忘れられていったようである。しかしそれこそがプロトタイプが発展する原動力であったと筆者は考える。

こうした変化の一方、一貫性もある。すなわち運動選手として表される墓主像が、基本的に若者という点である。つまり運動選手像は、若者を表すためのモチーフであり続けた。成人前で社会的には半人前ではあるものの、家柄の良い若者を象徴する図像として、スポーツは最適だったのであろう。逆にいえば、それ以外に適切なものがなかったことになる。

運動選手像墓碑は、前6世紀以降、様々な地域で制作され、墓碑図像の中でも重要な図像であり続けた。このことは、運動選手像が若者のための図像である以上、若い男性の死が常に特別扱いされていたことを物語る。墓碑を建立する社会階層がある程度限られていた時代、身分よりも子供、特に嫡男の早逝が社会に対して主張すべきことであったためと考えられる。運動選手像の長期間にわたる繁栄から、そうした価値観が少なくとも前6-4世紀の間、不変だったことを窺い知ることができる。